

加賀友禅

加賀友禅は、手描きの絵柄と5色の独特の色調で、鮮やかで写実的な自然のイメージを絹に表現する、手描き染めの様式である。京都の京友禅、東京の江戸友禅と並び、日本三大染色のひとつに数えられている。加賀友禅は、バッグやスカーフなどの布小物の装飾や、豪華な着物などにも用いられている。

加賀友禅の歴史は16世紀、現在の石川県である加賀藩に始まる。当時、加賀藩は絹織物の一大産地であったが、ピンク色の無地染めの織物であった。17世紀半ばになると、職人たちは生地にベーシックな模様や絵を描くようになった。次の発展段階は、絹の扇絵師で有名な宮崎友禅（?-1758）によるものである。歴史的な記録はまちまちだが、友禅は加賀の出身か、1712年頃に京都から金沢を訪れたとされている。多彩な色使いを可能にする防染の技術は、加賀の染物師に受け継がれた。友禅の影響と前田藩主の支援により、加賀友禅は現在も続く洗練された芸術へと発展した。

加賀友禅の工程は、まず、絵師がイメージする絵柄（または一連のイメージ）を紙に描くことから始まる。そして、染めてない絹の長い帯に、ツククサの墨で輪郭を描く（墨は水溶性のため、線は後で洗い流される）。次に、専用の絞り袋で糊置きを塗って模様をなぞる。この糊が染料をはじくので、線に染料を閉じ込めることができる。

この後、その絵柄に色をつけていく。加賀五彩と呼ばれる藍、深紅、黄土、深緑、古代紫の5色のグラデーションの染料で、一枚一枚手描きしていく。花の絵の場合、花びらの一番外側から染料を塗り、内側に向かって刷毛で塗ることが多いため、端が最も濃く、中心に向かって薄くなるグラデーションが特徴的である。京友禅では、このグラデーションの方向が逆になる。

加賀友禅の絵柄を描き終わったら、絹を蒸して色を定着させる。次に、背景を染めるために、糊で絵柄を完全に覆う。糊は背景の染料をはじき、描いた絵柄を汚さないようにするためである。背景の染料も、毛足の短い幅広の刷毛を使って手作業で塗るが、絹の広い範囲に均等に色をつけるには、かなりの熟練を要する。さらにもう一度蒸して、地色を定着させる。

これで完全に着色された絹は、水洗の準備が整う。冷水と硬い筆を使い、ツククサの墨や糊、余分な染料を洗い流す。伝統的には、この工程は川や小川で行われ、長い絹の帯を棒に結び、流れに耐えるようにしていた。現在、工場の多くは浅い水槽に水を張っているが、冬場には金沢の川では、昔ながらの方法で作業する職人の姿を今でも時折見ることができる。

加賀友禅には、手描きの輪郭線から始まらない板場友禅がある。代わりに、柿渋で固めた型紙を使い、絹に一色ずつ色をのせていく。木版画や現代のスクリーン印刷のようなものである。

友禅染は 1955 年に重要無形文化財に指定され、石川県には 2 人の友禅技法保持者がいる。1955 年に木村雨山（1891-1977）、2010 年に二塚長生（1946-）の 2 人が保持者となった。石川県立美術館には、着物や、掛け軸、屏風など加賀友禅で染められた作品が多数展示されている。